

今週は成人式から始まった週であるにも係わらず、新成人のことよりも、定額給付金を初めとする第2次補正予算案に対する話が2週続き、各紙のコラムを踊っています。やはり、この未曾有の世界不況下では、景気対策を抜きにしては、コラムを書くことはできないようです。

「これまで低賃金で企業を下支えして来たのに、いざ不景気になれば真っ先にクビを切られるなんて、あんまりじゃないか……」と、非正規社員の怨嗟の声は、まさに頂点に達している中で、彼らの心を掴んだのが日本共産党のようで、日本共産党の支持率が上がってきています。

日本共産党では、これまで一貫して「国民主体の経済をポリシーに掲げて来たことが、再評価され始めた」と分析しているようです。

その日本共産党の党员であり、元委員長の故宮本顕治の妻でもあった宮本百合子のエッセイの「今年のことば」に、

「わたしたちが、真面目に自分たちの人生について考え、その人生がおかれている社会について考えたら、言葉をはっきり使うという一見些細なことが、どれほど重大な意味をもっているか、わからずにいられない。……

議員も閣僚たちもみんなわたしたちの税で、歳費を支払われている人々である。民主日本の四年目に、わたしたちはせめてははっきりと、いやなものはいやという言葉の使いかたとそれに準じた行動のとりかたを身につけたいと思う。」

という行があります。

この行は当時の女性の立場に関し述べてものですが、現在に置き換えれば、非正規社員に当てはまることであり、非正規社員も徐々にではありますが、言葉をはっきり使うという一見些細なことを始めてきています。

現在、国会に提出されている経済対策の目玉である定額給付金などは、「財務相の諮問機関が、定額給付金の撤回要求」が出されたにも係わらず、財務相は「見識の深い(財政審の)委員の自由な議論は重い」としつつ、「定額給付金はできるだけ早く年度内に実施したいという考え方は変わらない」と述べ、無視する意向のようです。

一方、野党からは、「政府のために働いている機関があえて定額給付金に対して異論を唱える。大変大きなことだ。麻生首相ももっと真剣、深刻に考えるべきだ。今からでも遅くない」と指摘しています。

さらに、選挙権を持たない高校生からも、「日本にもオバマ旋風巻き起これみんな待ってる頼れる総理」との句が寄せられているなど、正に、政府与党は国民から遊離した状況にあります。

これほど、四面楚歌の中に置かれている政府与党、何故、「定額給付金」を第2次補正予

算案から分離できないのでしょうか。政府与党は野党が「定額給付金」を盾に、衆院解散を目的に予算案の成立を阻んでいると言っていますが、我々国民にとって、政府与党こそ、「定額給付金」を人質にとって選挙厭さのために、予算案の成立を阻んでいるように見えますが。

結局、3代続いて国民の付託を受けていない総理の前では、何を言っても無駄のようで、任期切れまで待って「民主日本の四年目に、わたしたちはせめてははっきりと、いやなものはいやという言葉の使いかたとそれに準じた行動」をとるしかないようです。



< 四面楚歌 >

韓信は自ら 30 万の兵を率いて 10 万ほどの楚軍と戦い、初めの内は楚軍が優勢だったが、徐々に漢軍が盛り返し、最後には楚軍が敗れた。

敗れた楚軍は防壁に籠り、漢軍に幾重にも包囲され、夜、項羽は四方の漢の陣から故郷の楚の歌を聞き、「漢軍は既に楚を占領したのか、外の敵に楚の人間のなんと多いことか」と驚き嘆いた。

この故事から周囲を敵に囲まれることを「四面楚歌」と言うようになった。

このときの戦いは、紀元前 202 年に項羽の楚軍と劉邦の漢軍との間で垓下（現在の安徽省蚌埠市固鎮県）を中心に行われ、垓下の戦いと云われる。

この戦いで項羽が死んだことによって劉邦の勝利が完全に決定した。



菊池梨月作「核下別離」



核下の図

朝日：「財務相の諮問機関が、定額給付金の撤回要求へ」(1/15)

財政制度等審議会（財務相の諮問機関）は15日の会合で、今国会で審議中の2兆円の定額給付金を撤回し、使い道を見直すよう政府に求めることで大筋一致した。近く中川財務相に意見を伝える。政府が決定した政策を審議会が批判するのは異例だ。

財政審は西室泰三会長（東京証券取引所グループ会長）の3選を決めた。

西室会長は会合後の記者会見で、08年度2次補正に盛り込まれた定額給付金に対し、委員から「正すべきは正すべきだ。このようなものが次々出てきたら国家財政は成り立たなくなる」「本当に役立つものに振り向ける方がいい」などの批判が相次いだことを明らかにした。

西室会長は「給付金で予算審議が空転すると、経済への影響が大きい。2兆円はしっかりした議論を与野党でやってもらうことが必要ではないか」と述べた。

朝日：「定額給付金、財政審の異論に閣僚ら反論」(1/16)

財政制度等審議会（財務相の諮問機関）が定額給付金を撤回すべきだとの考えで大筋一致したことに対し、閣僚や与党幹部が16日、記者会見で相次いで反論し、当初の方針通り08年度第2次補正予算案と関連法案の早期成立をめざす考えを強調した。

中川財務相は「見識の深い（財政審の）委員の自由な議論は重い」としつつ、「定額給付金はできるだけ早く年度内に実施したいという考え方は変わらない」。与謝野経済財政相も「財政審の言っている通りの方向に進みがたいものがある」と述べた。

また鳩山総務相は「衆院を通ったものに、事後的に意見を言うのは初めてのことだ。世界同時不況から早く抜け出すためのきっかけづくりになる」と反論。給付金を主導した公明党の太田代表も「衆院で可決され参院に行っていることを、しっかり踏まえて頂きたい」と苦言を呈した。

< 財政制度等審議会 >

予算編成をはじめ、国の財政全般のあり方を検討する財務相の諮問機関。2001年の中央省庁再編に伴い、旧大蔵省にあった5つの審議会を統合して発足した。有識者や経済界、労働界の代表などの委員で構成される。個別の課題について審議する財政制度、財政投融资、国家公務員共済組合、たばこ事業等、国有財産の5つの分科会がある。

財務省の担当部局から意見を聞いたり、地方で公聴会を開くなどして、年2回、新年度予算の概算要求基準と財務省原案の決定前に財務相に建議（意見書）を提出する。財務省は、建議のほか、経済財政諮問会議が12月上旬にまとめる「来年度予算編成の基本方針」なども踏まえ、12月下旬に来年度予算の財務省原案を編成する。

< 西室泰三（1935-） >

実業家。山梨県出身。慶應義塾大学経済学部卒。

取締役東芝アメリカ社副会長などを経て、東芝代表取締役社長。現在同社取締役会長。

社外職として、内閣府地方分権改革推進会議議長（平成13年～16年）を務めたほか、日本経済団体連合会副会長、財務省財政制度等審議会会長、日米経済協議会会長、（社）日本広告主協会理事長、（株）WOWOW 取締役、（株）角川ホールディングス取締役などを兼任。



春秋：「新年もはや半月」(1/15)

どれも「たのしみは」と詠み出して「……とき」と締める和歌の連作「独楽吟（どくらくぎん）」を、作家の新井満さんが現代散文に「自由訳」し1冊の本にした。「たのしみは庭にうゑたる春秋の花のさかりにあへる時時」。52首中、この歌が一番のお気に入りだそうだ。

詠み手の橘曙覧（たちばなあけみ）は、明治期に正岡子規が短歌革新の手本と称揚したことで知られるが、以後長く忘れられた歌人だった。それが平成になって復活するのは、1994年に米国を訪問した天皇皇后両陛下を迎える式典のスピーチにクリントン大統領が「独楽吟」の一首を引用してからだろう。

幕末の尊皇国学者なので、世相を憤る「忘れむと思へどしばしわすられぬ歎（なげ）きの中に身ははてぬべし」のような歌も詠んだけれど、この連作には日々の生活のあれこれに小さな喜びを見いだす、人生肯定の姿勢がある。「『独楽吟』の生き方をすれば、あなたもまちがいなく幸せになれる」。そう新井さんは書く。

新年もはや半月、経済危機の黒雲は暗さを増している。こんなときだ、八方塞（ふさ）がりでも幸福になれる方法を学びとろう。「たのしみはそぞろ読みゆく書（ふみ）の中（うち）に我とひとしき人をみし時」「たのしみは昼寝せしまに庭ぬらしふりたる雨をさめてしる時」「たのしみはつねに好める焼豆腐うまく煮（に）たてて食はせけるとき」

< 新井満 (1946-) >

作家、作詞作曲家、歌手、写真家など。新潟県新潟市生まれ。上智大学法学部卒。

電通に入社し、環境ビデオ映像の製作に携わるかたわら、小説・歌などの創作活動に入り、2006年定年退職。

1977年カネボウのCMソングとして自ら歌唱した『ワインカラーのときめき』（作詞：阿久悠 作曲：森田公一）がヒット。

1987年『ヴェクサシオン』で第9回野間文芸新人賞受賞。1988年『尋ね人の時間』で第99回芥川賞受賞。

2003年に写真詩集『千の風になって』を発表。それに曲を付けた『千の風になって』は、秋川雅史、加藤登紀子、スーザン・オズボーン、新垣勉などが歌い、2007年日本レコード大賞作曲賞を受賞。



< 橘曙覧 (1812-1868) >

歌人。

越前国石場町（現・福井県福井市つくも町）に生まれ。名は五三郎茂時。「清貧の歌人」と呼ばれる。

28歳で京都の頼山陽の弟子、児玉三郎、その後、飛騨高山



『橘曙覧遺稿志濃夫廼舎歌集』

の本居宣長の弟子、田中大秀に入門し、歌を詩作。本居宣長の国学の諡号「秋津彦美豆桜根大人之霊位」を床の間に奉って、独学で歌人としての精進を続け、妻子や門弟からの援助、寺子屋の月謝などで生計を立て、清貧な生活に甘んじた。

1878 年橘曙覧の長男今滋が編纂した『橘曙覧遺稿志濃夫廼舎歌集』が正岡子規に、源実朝以来、歌人の名に値するものは橘曙覧ただ一人と絶賛され、文学史に残るものとなった。

1994 年、今上天皇、皇后がアメリカを訪問した折、ビル・クリントン大統領が歓迎の挨拶の中で、曙覧が編纂した『独楽吟』の中の歌を引用してスピーチをしたことで、その名と歌が再び脚光を浴びることになった。

天声人語：「現代学生百人一首」(1/16)

染みついた鉄のにおいがする髪をとかして思うもはや職人。青森県の工業高校3年の女生徒、荒谷夏希さんの詠んだ歌だ。北海道の農業高校3年、田守健太郎君は 幼き日遊び場だった畑作地今では父と僕との職場 とうたう。

毎年この季節、東洋大学から届く「現代学生百人一首」を楽しみにしている。急ぎ足で過ぎる青春の日々を、虫ピンで留めたような言の葉の数々。22回目の今年は全国から6万3千首が寄せられた。

入選作のテーマは様々だが、何と言っても人を恋う年頃だ。君の名の漢字を辞書で引いてみる心のしおりそうっとはさむ 高2、宮下唯(ゆい)。こんなにもキレイにノートをとるのはね君に「貸して」と言われたいから 高2、榊原香菜。

そんな胸に、孤独や憂いのさざ波も立つ。生も死も書けば一文字十五夜のすすきの中にぼつんとひとり 高1、安藤弘理(ひろみち)。見つけたらいけない気がする何故だろう 青い色した幸福の鳥 高3、鎌田美紅(みく)。

でも頑張る。駆け抜ける百メートルをおもいきりいらぬものが削(そ)ぎ落とされる 中3、鈴木花音(かのん)。限界は僕が思うほど近くないぶつかるとまでは走ってみようか 高1、村崎(崎は山へんに奇)愛奈(まな)。女の子の使う「僕」が、意外と爽快(そうかい)に響く。

大人に言いたいことだってある。平然と使われ続けた汚染米汚れているのは米か心か 高3、合田(ごうだ)佳祐。そして政治家にも。日本にもオバマ旋風巻き起これみんな待ってる頼れる総理 高1、松村かおり。Yes we can。希望の灯(とも)る世の中を未来の有権者も待っている。

<現代学生百人一首>

1987年に東洋大学が始めたイベント。

もともとは当時東洋大学の学長を務めていた歌人である神作光一が大学の知を社会へ還元する事業の一環としてはじめたもので、「現代学生のもの見方・生活感覚」をテーマに日本全国の小学生・中学生・高校生・高等専門学校生・大学生・短期大学生・専門学校生・専修学校生・各種学校生・および予備校生が歌った短歌を申し込み対象としている。

毎年60000首を超える応募があり、入選作が発表されると共同通信社・時事通信社が全世界へ向けて記事を配信される。また、教育の一環として学校全体で取り組むケースも増えている。

第21回 東洋大学「現代学生百人一首」入選作品100首 および小学生の部10首発表

<http://www.esquare-kamakura.net/toyo090118.pdf>

編集手帳：「一票ほしさの釣り餌」(1/14)

戦前に船会社を興して三大成り金のひとりと呼ばれ、戦後は第5次吉田茂内閣の農相を務めた内田信也氏に、語り伝えがある。乗っていた列車が転覆事故を起こした。

「神戸の内田だ。金はいくらでも出す、助けてくれ」。そう叫んだと、岩波書店刊「一月一話」などの書物は伝えている。ご本人の回想によれば「金はいくらでも...」とは言っていないそうで、世人がやっかみ半分に尾ひれをつけたのかも知れない。

「総理の麻生だ。定額給付金その他、景気対策に金はいくらでも出す。政権を、自民党を助けてくれ」。首相がそう叫んだわけではないが、世間の耳には聞こえたのだろう。

本紙の世論調査で78%の人が定額給付金に「反対」と答えた。支給をやめ、雇用や社会保障に振り向けるよう望む声が多数である。ご機嫌取りに小遣いを配るような、一票ほしさの“釣り餌(え)”を鼻先に垂らされた不快さを、多くの人を感じたらしい。

内閣の不支持率もついに7割を超えた。自腹の内田氏とは違い、「いくらでも出す」金は税金である。政権の転覆事故が起きる前にもう一度、進むべき線路を点検したほうがいい。

<内田信也(1880-197)>

実業家、政治家。茨城県生まれ。東京高等商業学校(現一橋大学)卒。宮城県知事、鉄道大臣、農商務大臣、農林大臣等を歴任。

1905年三井船舶に入社、1914年同社を退社。退職金と兄から借りた分とを併せて2万円を資本に、船会社を創立。第一次大戦勃発直後の山下亀三郎、勝田銀次郎と並ぶ三大船成金の一人。

船舶事業で財を成した後、1924年立憲政友会衆議院議員となり、豊富な資金で政治家としても活躍、東條内閣の閣僚。

戦後は公職追放にあい、追放解除後の1952年に再び衆議院議員。第五次吉田茂内閣で農林大臣をつとめ、明治海運取締役会長等を歴任し海運界に重きをなした。



余禄：「筋の通らない金？」(1/15)

300文で買った仏像を磨いていると、台座の下の紙が破れて中から現れたのが50両だ。落語「井戸の茶碗(ちやわん)」である。「仏像は買ったが金は違う」と50両を元の持ち主の貧乏浪人に返そうとするが、こちらも「一度売った以上、自分のものでない」と拒む。

落語には「お前のだ、受け取れ」という金を「筋の通らない金は受け取れない」と突き返す騒ぎがよくある。拾った金をめぐっての大岡裁き「三方一両損」、強情張り同士の間で大金が宙に浮く「意地比べ」を思い浮かべる方もおいでだろう。

「井戸の茶碗」ではいったんは大家の仲介で50両を分け合う。だがただでは金をもらえないと浪人が渡した汚い茶碗がその後300両の名品と分かり、また騒ぎに……。最後までさもしい振る舞いなど一つも出てこないさわやかな人情話だ。

さて昨今目を引くのは報道各社の世論調査で定額給付金を支持しない層が6割から8割近くもいたことだ。誤解ないようにいえば、何も「受け取らない」というのではない。だがその金が雇用対策や社会保障に使われるならば、給付金など要らないという人々がそれだけいるのだ。

「矜持(きょうじ)」などと口にしないが、たとえ貧しくとも金より心意気という落語を愛してきた日本の庶民だ。職を失った人の嘆きを聞き、景気の急落を目の当たりにすれば、より有効で将来の希望につながる金の使い方はないかと思って当然だ。

給付目的もいつしか生活支援から景気対策に変わり、富裕層の受け取りを「さもしい」と断じた首相発言も一転撤回された。どうにも「筋の通らない金」になった2兆円だが、この際その用途を含め一から筋を入れ直せないか。

<大岡忠相(1677-1752)>

江戸時代中期の幕臣・大名。西大平藩初代藩主。

将軍徳川吉宗が進めた享保改革を町奉行として支え、江戸の市中行政に携わったほか、評定所一座に加わり、地方御用や寺社奉行を務めた。

越前守だった事と『大岡政談』や時代劇での名奉行としてイメージを通じて、現在では大岡越前として知られている。

大岡裁きというのはほとんどが後の人の作った逸話で、本当に扱った裁きは「白子屋お熊事件」くらいだと云われている。

